メモリー

蒼山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メモリー

【Ｎコード】
Ｎ５２５１Ｄ

【作者名】
蒼山

【あらすじ】
欲しい記憶、何でも作ります。お代は結構です。お代は、です。

『お望みの記憶、作って差し上げます。
お代は、いりません。
メモリー工房「日向」
ＴＥＬ：ＸＸＸ－ｘｘＸｘ－ＸｘＸＸ』

「優ちゃんはいいわねぇ、お父さんもお母さんもいるし、こんなお家もあるし……。おばあちゃんはね、戦争でお父さんをなくして、その後お母さんも病気で死んじゃって、小さい頃に知らないところに預けられたの。そこではとってもひどい扱いをうけてね……」
「ちょっと！やめて下さい、お義母さん！その話はもう何十回と聞きました！」
俊子（としこ）は言った。
俊子は、義母の昔の不幸話をもう耳にタコができて、そのタコが硬くなりすぎて触っても感じないという程、聞かされていた。
「あんたに話してるんじゃないの！今は優ちゃんに話してるんだよ」
「優子にも話さないで下さい！悪い影響を受けます！」
「わたしゃ悪いことは何も言ってません！それともアレかい？わたしの昔の体験は全てわたしが悪いとでも言うのかい？え？俊子さん」
「そんなこと言ってません。それに、そんな愚痴をこぼしたって、もう過ぎたことなんですからどうにもなりません。だからやめて下さい」

いつもいつも愚痴を言われると、暗い空気になる。
それがいやで、俊子は義母である西村トキ子に愚痴をやめるよう言い続けていた。

六畳一間の安アパートの一室で、電話が鳴った。
風呂からあがったばかりの日向(ひなた)カゲロウは、タオルを腰に巻き、電話に出た。
肩まである黒髪、黒い瞳の、ある程度整った顔立ちを持つ、少しクールな感じの青年である。
「はい、日向です」
「あの……新聞の広告を見たのですが……本当なんですかい？」
老婆の声だった。
この感じは、冷かしではない。
日向はそう思った。
「……何が、ですか？」
「その……記憶をくれるということですわい」
「……あなた、こんな胡散臭いところに電話してくるって事は、ここにすがるしかないって事ですよね。溺れる者が、掴んだ藁を信じないでどうするんですか？ホントに助かるのかと疑って藁を放してしまうと、溺れ死ぬでしょうが」
何か理屈っぽくて怖そうな人だと思って、諦めて電話を切ってくれないだろうか。
日向はそんなことを思った。
今日はもう眠い。……まだ五時だが。
「あの……もしもし」
老婆の声で我に返った。
「あ、ハイ。えっと、それで、ご用件は何ですか？……どんな記憶が、お望みですか？」
「それは、直接会って話します」
「……いいでしょう。では、お名前とご住所をお願いします。すぐに伺います」
日向は、諦めてもらうことを、諦めた。

「どうも、はじめまして。日向カゲロウです。西村トキ子さん、ですね？」
黒ずくめの姿で現れた日向は、目の前の老婆にそう尋ねた。
「はい。お待ちしておりました。ささ、中へどうぞ」
「……では、お邪魔します」

「それで、どんな記憶をお望みなんですか？」
日向とトキ子は、居間のテーブル越しに向かい合わせに座っていた。
「ええ、実は……」
トキ子は、今まで家族にさんざん言ってきた愚痴とほぼ変わらない内容の事を言った。
父母が小さい頃に死んでしまったこと、預けられた先でひどい扱いをされたこと……。
「……だから、わたしゃ父と母の記憶が欲しいんです。三人で、楽しく暮らしている……そんな記憶が、わたしゃ欲しいんです」
「……なるほど」
日向は考えた。
この老婆に、望みの記憶をやるかどうか……。
また、記憶を与えるとしたら……何を対価にしようか、と。
そう。記憶を構築するためには、そのための対価が必要になるのだ。
その対価をベースに、記憶を構築するのである。
「わかりました。一度、あなたの心の中に入らせてもらいます」
「え？こ、心に？」
トキ子は驚いた。当たり前の反応である。
「大丈夫、ちょっとボーっとなるだけです」
日向はポケットから小さな蝋燭と燭台を取り出した。

蝋燭を燭台に立て、マッチを擦って蝋燭に火をともした。
ぼっ。
と、小さな音が鳴って、火が蝋燭に燃え移った。
火が、青白い色に変わった。
「この火を見てください」
日向に言われたとおり、トキ子は蝋燭の青白い炎を見た。
すると、居間の様子がめまぐるしく変わっていった。
全てがぐにゃりと歪み、そして、元に戻ったときは元の居間の姿ではなかった。
西村トキ子の、心の中を具現化した部屋になったのだ。
ダークグレイの空間に、家具や家電など、色々な物が置かれている。
部屋の中央には、青白い火のともった蝋燭の置かれた机、そしてそれを見つめる西村トキ子が座った椅子がある。
この空間では、西村トキ子が心の核。そして、蝋燭の火が命である。
今トキ子を殺せば、元の居間に戻った時にはトキ子は精神崩壊を起こしている。
今蝋燭の火を消せば、元の居間に戻った時には、トキ子は何の傷も無く、命をそのまま持っていかれたように、死んでいる。
……特に荒れている様子は無い。
日向は思った。
しかし。
「……？」
部屋の隅に、ひときわ輝くものがあった。
近づいて見てみると、トキ子の両親の写真が入った写真入れだった。
中の写真はぼやけているが、ケースだけはピカピカに磨かれている。
そしてその隣には、孫とその両親の写真があった。少しだけだが、埃をかぶっている。
これが、相応しい。
日向はその写真を、トキ子が見つめている蝋燭の火で燃やした。
青白い炎に包まれ、写真は跡形も無く消えた。

すると、トキ子の両親の写真が、鮮明になった。
日向はポケットからもう一本蝋燭を取り出した。
机の上の蝋燭の火で、その蝋燭にも火をともした。
またしても、青白い火だった。
そして、トキ子が見つめている方の蝋燭の火を吹き消した。
部屋が再び歪み、そして元の居間に戻った。
火がもう一本の蝋燭に残っているので、トキ子は死なない。
「……あ、あたしゃ何を……」
「どうです？わかりますか？お父さんとお母さんの、記憶……」
「あ……あぁ！わかる！お父さんと、お母さんが、思い出せる！」
「よかった。二人の記憶が無かったということも、しばらくすれば忘れていきます」

「ただいまー。あれ、お義母さん、いたんですか」
「ただいま、おばあちゃん」
「母さん、今日は俺も早かったんだよ。これからいっしょにどっか食べに行こうと思ってるんだけど……」
「……あんたら、だれだい？」

（後書き）

どうも、まいど蒼山でございます。
二時間で書き上げたこの短編、ほんとはもっと別の話だったのですが、書いているうちにまた……。
いい加減学習しろよな。
今回はピッツァも音楽も出てきてません。ほんとは出したかったけど……。
よかたら蒼山のべつの作品も読んでみて下さい。
それでは……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5251d/

メモリー

2011年1月19日04時12分発行